

オオスジコガネ

有明森林での昼食休憩時、育成稚樹たちを見回っている時、オニグルミの幼樹の葉に止まっている美しい典型的なコガネムシに出会いました。デジカメの撮影記録は2017年8月2日12時37分でした。

コガネムシ科には大物のカブトムシが属しています、大小様々ですが、概して美しい金属光沢の装いの面々が図鑑を賑わせるのですが、このオオスジコガネは中でも美しい方です。大きさは17~20mm。出現は北海道では7~8月。食草



は成虫では針葉樹の葉、幼虫はその根を食べるとのこと。有明森林ではトドマツに育てられているのでしょうか。しばしばトドマツの若木が葉を茶色にして立ち枯れているのを見かけますが、こいつらの幼虫の仕業であるやも、と思う次第であります。分布は日本特産種とかで、離島を含むほぼ日本列島全般のようです。

オオの付かないただのスジコガネというのもおりますが、こいつは、少し小ぶりで、上翅の筋間に光沢がありませんので、美的にはオオスジよりも見劣りします。

コガネムシは漢字表記で「黄金虫」と書きます。色の変異で黄金色をしたのも本当にいるのです。それで童謡「黄金虫」がうまれることになったのでありましょう(左下)。筆者の友達のカラスに対して「七つの子」というリスペクト満々の童謡を残してくれた野口雨情と中山晋平コンビの作でありますので、ガキの頃から愛唱した歌ですが、蔵を建てるほどのお金持ちにしては、子供に対して水飴ごときの貧乏らしいものを与えるとはいかがなものか、と思ったりしますが、時代背景が大正11年作とありますので、水飴が贅沢品であったものと理解できなくもありません。昭和20年大



東亜戦争終結後の飢餓時代を体験してきた高野少年にしても、毎日やってくる紙芝居の売り物が水飴で、それを買えなかった切ない思い出が蘇りますので、お金持ちの黄金虫が子供たちに水飴をおごることもありか、と思われた次第でありました。